

からめきの瀬の正体（波蝕台）

温暖化によって削り取られた下総台地の痕跡



柴又土手 江戸川 北総線 国府台 和洋女子大



撮影 堤 昌明 (社)日本ハンググライディング連盟 MPG 教員



柴又船着場から



正面 柴又船着場 金町浄水場 金町 JR 南口高層ビル

葛飾は「昔海だった」といわれています。しかし、海だったのは縄文時代の前期から弥生時代という限られた時代で、それ以前の旧石器時代は陸地でした。旧石器時代の地球環境は、温暖化とは逆の寒冷期もしくは氷河期と呼ばれる寒い時代で、今から2～3万年前には海水面が現在よりも100メートルも下がっていたといわれています。

縄文時代が始まる1万2千年前頃には、地球環境は寒冷から温暖へと変化し、徐々に気温が上昇して次第に海水面を上げていきました。この縄文時代の海水面の上昇が、まさに危惧される温暖化と同じ現象なのです。

縄文時代に起こった海水面の上昇の痕跡を今でも観察することができます。江戸川の柴又付近には引き潮の時に河床に岩盤が露呈することがあります。この岩盤は「からめきの瀬」とも呼ばれるもので、地質的には波蝕台ととらえられるものです。縄文時代の温暖化による海水面の上昇によって、海が内陸に入り込む過程で、下総台地の西端が波によって台地表層のローム層を削り取ってしまった結果、その下の固い岩盤だけが残ったのです。

江戸時代に書かれた『嘉陵紀行』の「がらめきの瀬」の項には、「古、この所に石船沈て、水底に石あるゆへ、水棹にさはりて、がらがらと音をするをもて、名付と云」と記しています。しかし、「からめきの瀬」の正体は、石船が沈んだ石ではなく、温暖化による海水面の上昇によって削り取られた下総台地の痕跡なのです。

「からめきの瀬」は、縄文時代の温暖化が起こる前に、葛飾の柴又辺りまで下総台地が張り出していた名残であり、地球の環境問題を考える上でも重要な資料といえるのです。

(解説) 学芸員 谷口 榮

柴又エコロジー2000 <http://www.vheart.ne.jp>